西洋近現代史研究会報告要旨シリーズ第 3 号
2018 年 12 月

マリアナ諸島をめぐる戦争の記憶の「もつれ」
―追悼と顕彰の狭間から考える―

新井　隆

Ⅰ　はじめに―マリアナ諸島の歴史的背景

グアムやサイパンが位置するマリアナ諸島は 17 世紀後半以来、スペイン、ドイツ、アメリカ、日本という四つの大国から約 350 年にわたり植民地支配を受けてきた歴史がある。特に 20 世紀前半という期間に焦点を絞ってみると、マリアナ諸島は日米が戦略的な観点からせめぎ合う場となっているのである。

1941 年 12 月には、アジア・太平洋戦争の開戦と同時に、2 日間の空襲を経て、日本軍がグアムにも上陸し、以後 2 年 7 ヶ月に及ぶ占領統治が行われることになった。こうしたマリアナ諸島における植民地支配や戦争の歴史は、同諸島及びそこに暮らすチャモロの人々に政治的・精神的な「分断」をもたらすことになった。特に、アジア・太平洋戦争中の日本によるグアム占領統治においては、サイパンやロタのチャモロが日本軍の通訳や補助として、グアムのチャモロに身体的懲罰を行うという事態も生じた。

このように日米両国の植民地支配・戦争の舞台にされてきたマリアナ諸島であるが、現在も島のいたるところに「戦争の痕跡＝戦跡」が残されている。さらに、サイパンとグアムの状況を比較してみると、両者の辿ってきた歴史的背景の違いが如実に表れているとともに、大国による植民地支配・戦争により刻み込まれてきた傷跡の「複雑さ」も垣間見ることができる。こうしたマリアナ諸島における「戦争」で犠牲になった人々はどのように想起されてきたのだろうか。

Ⅱ　マリアナ諸島における「戦跡」と戦没者追悼・慰霊の関わり

(1)グアムにおける戦争の記憶の想起

グアムとサイパンに点在している「戦跡」の残され方を考える時、マリアナ諸島が被ってきた植民地支配と戦争の歴史を無視することはできない。両島における「戦争の痕跡」には、日米がマリアナ諸島で軍事的政治的に鎬を削ってきた歴史的背景が色濃く投影されている。まず、グアムについては、アジア・太平洋戦争前後のアメリカによる植民地支配の影響が強く、アメリカの「解放」言説が「戦跡」にも明確に表れている。太平洋戦争国

立歴史公園として維持・管理されている「戦跡」空間を見てみれば、戦争の記憶のアメリカ化ともいうべき表象を垣間見ることができる。他方で、グアムの戦争の記憶をめぐる日本の位置づけといえば、アジア・太平洋戦争中の 2 年 7 ヶ月の厳しい占領統治を行ったものとして捉えられることがほとんどだ。戦後しばらくは、日本の慰霊巡拝団や遺骨収集団が同島を訪れることはあっても、慰霊碑などの建立については、小規模なものがいくつか実施されたのみだった。そんな中、1960 年代に入ると、日本側とグアム側の協同事業として、グアムに戦没者のための慰霊公苑を建設する動きが出てくる。この動きは、かつての占領者と被占領者が行う「和解」の一環とも呼びうるものだったが、米本土の退役軍人や政治家から反対の声が上がり、結果として完成が先延ばしになった上、当初の予定とはかけ離れたかたちでの慰霊公苑がつくられることになった。

さらに、この慰霊公苑建設に反対していた退役軍人らは、グアムで第二次世界大戦におけるアメリカを記念する施設の建設を求めていった。つまり、アメリカの一部としてのグアムの位置づけを再確認しながら、より両者の結びつきを強化する—実際には、必ずしも対等・均衡なものとは言えないが—ことを意図していたといえるのである。こうした動きは、後に太平洋戦争国立歴史公園として具現化されていくことになった。このような太平洋戦争国立歴史公園建設の背景を踏まえると、グアムの「戦跡」空間の形成にアメリカという存在が与える影響力の強力さを窺い知ることができる。

加えて、戦後グアムにおけるアメリカによる軍事化の推進が、戦争の記憶のアメリカ化をより一層加速させることにもなった。しかし、同時にチャモロの土地接収問題や主権・自己決定権の問題とも相俟って、同島における戦争の記憶—特にアメリカとの関係におけるもの—は「複雑さ」を帯びていく。

(2) サイパン（北マリアナ諸島）における戦争の記憶の想起

続いて、サイパンについて見てみると、グアムの場合とは逆に記念・顕彰や追悼・慰霊の諸活動を含め、戦争の痕跡の残され方に日本の影響が多分に表れていることが看取できる。日本政府による「中部太平洋戦没者の碑」や「戦没日本人の碑」が建てられているのに加え、日本の宗教団体、地方自治体、戦友会など各種団体、あるいは個人の手による雑多な慰霊碑群や「墓地」が島内各地に散在している。それも、戦後間もなくに建てられたものもあれば、ここ十年来で建てられたものもある。つまり、それだけの長きにわたって、日本からの慰霊活動が行われてきたことになる。戦後サイパンで建立されたのは、これら

慰霊碑群や「墓地」だけに止まらない。戦前の神社や奉安殿の再建なども、地元政府や観光局などの協力のもと、行われている。かつて日本が支配下に置き、日米戦の主戦場にもなった島の戦争の記憶をめぐる諸活動には、日本というアクターが深く関わっていることが浮き彫りになる。

ただ一方で、サイパンにおける戦争の記憶をめぐる諸活動にアメリカというアクターが全く関与していなかったわけではない。戦後ミクロネシアにおけるアメリカの支配（国連の戦略的信託統治）が及んでいたサイパン（北マリアナ諸島）でも、グアムで見られたような「解放」言説の浸透が試みられた。言い換えると、北マリアナ諸島における戦争の記憶の想起に関しても、アメリカは自らの影響力を保持・伸張させようとするねらいがあったといえる。しかし実際には、グアムのようには、アメリカによる「解放」言説は浸透しなかった。ガラパンの海沿いに位置するアメリカ記念公園は、マリアナ諸島でアジア・太平洋戦争の戦闘が終結してから、50 周年や 60 周年という節目の年を目処に徐々に整備されてきた。だが、グアムの太平洋戦争国立歴史公園に比して、時期的な遅れや公園化の程度の違いなど、整備のされ方に明確な差があることがわかる。裏を返せば、前述した通り、サイパンでは戦争の記憶をめぐる諸活動において、日本の影響が根強く残っている分、記憶のアメリカ化が進みにくい素地があるといえるだろう。

(3) 現地住民に関する戦争の記憶の想起

ここでは、グアムとサイパンを比較した際の大きな違いの一つとして、戦争の惨禍を被った現地住民に向けたメモリアルやモニュメントの位置づけにも触れておきたい。グアムでは、戦時中に犠牲になったチャモロのための記念碑やそれに付随する各種追悼の諸行事が毎年実施されている。メモリアルは、地元コミュニティや記念財団等により建てられたものがあり、中にはチャモロ語のみで碑文が刻まれたメモリアルもある。追悼行事についても、それぞれ始まった時期や主催者などに違いはあるものの、現在確認できるだけで 6～7 件の諸行事が継続的に毎年実施されている。つまり、チャモロの人々が自らの手で戦争の記憶を想起するための空間づくりを担い、メモリアルはその空間づくりに一役買っているのである。それだけ、チャモロの人々の手による想起の諸活動が活発であるといえる。

一方で、サイパンについては、現地のカロリニアンやチャモロに向けた記念碑自体があまり多くないことに加え（現在確認できているのは、ガラパンとオレアイの二ヵ所）、そのいずれも米軍将兵に向けた記念碑とセットになっている。要するに、カロリニアンやチャ

モロの独立したメモリアルやモニュメントが確認できていないということになる。加えて、それらに付随したカロリニアン、チャモロのための追悼行事もグアムほど継続的に行われているわけではない。ただ、マリアナ戦終結 50 周年、60 周年、70 周年というように 10 年毎の大きな節目で、かつて北マリアナ諸島で戦った日米両軍の将兵と併せるかたちで、地元住民もともに記念行事に参加するといった事例は見られる。70 周年のポスターを見る限り、数日間にわたる大規模なものであることがわかるが、継続的というよりは断続的な記念・追悼の諸行事といえそうだ。

Ⅲ まとめに代えて―追悼・慰霊と記念・顕彰の狭間で

これら記念・追悼の諸行事の様相を踏まえると、マリアナ諸島における戦争の記憶の「つながり」も決して単純なものではないことがわかる。特に、グアムにおける戦没日本軍将兵に対する慰霊祭では、在グアム日本人有志の中から式典を挙行する動きが出てきたことが一つの特徴だといえる。慰霊祭の中で語られるのは、同島における戦争で犠牲になった全ての人々（日米両軍の将兵、グアムの現地住民）を慰霊するという姿勢だった。しかし、特に日本からの参加者（国会議員）や主催者のスピーチ内容をよく見てみると、そこには明らかに旧日本軍将兵に対する「慰霊」と「顕彰」が織り交ざった様子を垣間見ることができる。

以上のように、戦争の痕跡の刻まれ方や追悼・慰霊ならびに記念・顕彰という想起の仕方の違いからこの「もつれ」について考えてみると、それらの違いの背景には日米による植民地支配や戦争にさらされてきたマリアナ諸島という姿が浮かび上がってくる。戦後も同諸島の戦争の記憶の想起に対して日米の影響力は持続しており、追悼・記念の諸行事においても、チャモロの人々が日本やアメリカとの距離を測りながら、自らの立ち位置を定めつつ、戦争の記憶の想起の仕方を規定していくという様子が垣間見える。こうしたマリアナ諸島・日本・アメリカの不均衡な関係性が追悼・慰霊と記念・顕彰のはざまに色濃く投影されることで、三者の中でも特に、マリアナ諸島の人々が抱えている戦争の記憶に「複雑さ」が帯びてくるのである。

最後に、筆者がこれまで行ってきた調査・研究を踏まえつつ、今回の報告でも言及してきたある表現について、再度触れておきたい。

「赦すけれども、忘れない」

この表現は、特にグアムにおける戦争の記憶の表象を分析する過程で、必ずと言っていいほど出会うものだ。グアムを含む西太平洋におけるアジア・太平洋戦争の戦闘が終結して 70 年以上が経つが、その中でグアムの人々は、虐殺現場の訪問・追悼式や記念ミサといったかたちで戦争の記憶を想起・継承する営みを紡いできた。「何を忘れない」のかという問いは、グアムを含むマリアナ諸島におけるアジア・太平洋戦争の記憶をめぐる三者（グアム／北マリアナ諸島・日本・アメリカ）の認識のスタンスを考える上で、非常に重要なものになってくるだろう。「忘れない」が指している出来事が「誰に」よるものなのか、その想起のされ方まで含めて考えることにより、グアム（マリアナ諸島）の人々が抱えている戦争の記憶の「もつれ」を解きほぐすことにもつながっていくのではないだろうか。

※西洋近現代史研究会 10 月例会：報告要旨
於：専修大学神田校舎 7 号館（大学院棟）7 階 773 教室
（2018 年 10 月 13 日）

（2018 年 11 月 30 日受理、2018 年 12 月 10 日公開）